

What Facts about Ainu History Should Be Taught to School Children : Taking for Example Narratives on How the Ainu People Helped the Settlers in Abashiri Region during the Meiji Pioneering Phase

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5604

<研究ノート>

“明治時代の網走の暮らし”とアイヌ —小学社会科のための素材探し—

齋 藤 玲 子*

What Facts about Ainu History Should Be Taught to School Children: Taking for Example Narratives on How the Ainu People Helped the Settlers in Abashiri Region during the Meiji Pioneering Phase

Reiko SAITO

This Paper presents the angle and information that should be added when we teach the history about the Ainu People to elementary school children. It is necessary to teach that Ainu People were invaded and discriminated by Japanese settlers since the Meiji pioneering phase. However the author has felt apprehensive that both non-Ainu and Ainu children will not have good images of their ancestors if they are taught only about invasion and discrimination. This paper introduces the narratives that Ainu People helped the settlers from Honshu (Japanese mainland) by sharing knowledge of usage plants, catching animal and fish etc. The author is hoping for the children to understand the Ainu culture which has adapted Hokkaido environment.

1. はじめに

本稿は、小学4年生の社会科の一環で「アイヌの歴史と文化」について解説するために、現在不足していると筆者が考える視点と情報を提示したものである。

義務教育でアイヌに関することがらは、学習指導要領では中学校の社会科で江戸時代の鎖国下の対外関係の一部として「北方との交易をしていたアイヌについても着目させるようにすること」とされているのみであり、小学校でのアイヌに関する学習は、指導要領がなく、学校や教員の判断に委ねられている。

小学3・4年の社会科では、自分たちの住む地域について学習し、後半の4年生では「生活の変化や先人の働き・苦心」などを学ぶことになっている。北海道においては地域の歴

* 北海道立北方民族博物館主任学芸員 (Hokkaido Museum of Northern Peoples)

キーワード アイヌ、開拓期／拓殖期、移住者、学校教育

Key Words Ainu, Pioneering Phase, Japanese Settlers, School Education

史の一部として、アイヌの歴史や文化について数時間扱う学校が多いと考えられる（アイヌ文化振興・研究推進機構 2004；伊藤 2009）。アイヌの歴史や文化に取り組む授業時間は限られており、児童の知識や発達段階を考慮しても、網羅的に教えることは難しい。地域学習のなかで、アイヌ民族の歴史や文化に目を向けさせ、その理解を深めるには、どのような内容を端緒とするのが適当なのだろうか。

明治期の開拓政策により、アイヌの人びとは土地や資源の利用が侵害され生活が困窮するとともに、少数者として社会的に差別を受けるようになり、独自の風習が禁止されるなど文化的にも変化を余儀なくされた。これら明治期の政策と結果が、アイヌ民族に後々まで続く深刻な打撃を与えたことは、伝えるべき歴史上の重要な事実である。一方、そればかりを強調しすぎるのもどうかと思うのである。筆者が危惧するのは、子どもたちが最初に学ぶことがら、移住者増加の代償のように落ちこんでゆくアイヌ民族の立場というのでは、両者に対して良いイメージを持ってないのではないかと、ということである。

和人のみ・アイヌのみの歴史を独立して語るだけでなく、相互の関係をとらえて教えるべきという意見を聞くことが増えてきた（北原 2009など）。また、同時代の普通の和人のくらしと比較することで、文化には優劣はなく、環境に応じて築かれてきたことが理解されるのではないかと考える。

ここでは、アイヌが移住者を助けたという話などをとおして、アイヌの人びとがその土地の自然を熟知して生活してきたことや、抑圧されてきたのみではない関係を積極的に提示してみたいと思う。

2. これまでの副読本と歴史教育に関する論考

小学3・4年生で学ぶ「地域」は市（区、町、村）が中心であり、最後に自分たちの住む県（都、道、府）について学習することになっている。そのため、小学校3・4年生の社会科では、多くの学校で市（区、町、村）が作成した副読本を使用している。副読本では、「昔のくらし」「生活のうつりかわり」などとして、4年生で地域の歴史に触れるようになっている。北海道教育委員会の「北海道教育推進計画」（平成20～24年の例）では、「ふるさと教育の充実」の項目の一つとして「アイヌの人たちの歴史・文化等に関する教育の充実」を掲げている。しかし、副読本でアイヌの歴史・文化等に言及するかどうかは、自治体の判断であろう。ちなみに、網走市の『小学校社会科副読本 あばしり』（網走市社会科副読本編纂委員会 2008）では、年表以外にアイヌについては触れていない。

（財）アイヌ文化振興・研究推進機構では、アイヌの歴史や文化についての児童・生徒の理解を深めるため、学校教育での使用を想定した副読本を作成し、全国の小中学校に配布している。その副読本『アイヌ民族：歴史と現在 —未来を共に生きるために—』は、小学生用と中学生用があり、道内では小学4年生と中学2年生の全児童・生徒に配布されることになっている。副読本は平成13年に発行され、平成20年に新版が発行されている。

同財団では、最初の副読本作成に先立ち、同編集委員会を立ち上げ、『アイヌ民族に関する副読本の編集方針』と『アイヌ民族に関する指導資料』を刊行している。『編集方針』のほうでは、既存の副読本を検討した結果として、「多くの教材は、和人ととの関係について友好的な側面しか取り上げていませんでした」としている（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 1999：22）。その少し前、小学校教諭の佐々木博司氏も「千歳市の副読本には、昨年まで、和人が北海道に移り住んできた時代の話として、アイヌと和人が仲良く暮らしていたなどというくだりがあった。アイヌ民族の先住性に関しては、記述されていないものがあるばかりか、逆さまに解釈されるような曖昧記述も見られる。アイヌ民族に関する学習が、副読本を中心にこなされている今、これらの問題は決して軽視できない。」としている（佐々木 1998：8）。筆者は道内自治体作成の副読本のほんの一部しか調査しておらず、かつて「和人ととの友好的な関係」のみを取り上げていたという、その内容の詳細を把握できていないが、都合のよいことのみを記述する姿勢はもちろん問題がある。

『アイヌ民族に関する副読本の編集方針』では、続いて「しかし、アイヌの人たちへの差別や圧迫についても言及する必要がある、というのが編集委員会の立場です。いっぽう確かに、そうした状況のなかでもアイヌの人たちは現代に至るまで主体的に自分たちの生活や和人ととの関係を築こうとしてきました。つまり、和人によって差別・圧迫されてきたことと、和人と協力しあってきたこととは、いずれも歴史的事実なのです。」と記している。そして、『アイヌ民族に関する指導資料』の「本書のねらいと留意点」では、「たしかにアイヌの人々には和人に同化するよう圧力が加えられました。自分たちの伝統をどのように受け継ぎどのように変えていくかについての、自由な判断の余地も狭められました。しかしそのなかでも、自分たちの生活や家族などを維持するために新しいものを取り入れるという、アイヌの人々による主体的な努力が行なわれてきたのです。そこにあったのは、一方的に抑圧されただけの歴史ではないと考えます」とあり、「アイヌ民族の中に平等な教育や耕地の獲得が切実な要求として存在した」ことなどアイヌの人びとの主体的な面は、副読本において記述されている。

だが、「和人と協力しあってきたこと」については、同財団の『指導資料』や副読本自体に明確な記述はない。札幌市教育委員会の『アイヌ民族の歴史・文化等に関する指導資料 一第5集一』をはじめ、一般向けのアイヌの歴史に関する概説書など教員や児童が入手しやすそうな文献に、アイヌが和人に協力したことや和人がアイヌに助けられた、という記述は少ないように思われる。かつての「友好的な側面しか取り上げなかった」反省は必要であるが、「差別や圧迫」を中心に据えつつ、両方を記述することは可能であろう。

（財）アイヌ文化振興・研究推進機構の最初の副読本の編集委員長でもあった奥田純己氏は、それ以前に大学の公開講座で次のように述べており、少々長くなるが、引用する。

「歴史のなかでも、和人そして日本という国がアイヌ民族に対してひどいことをしてきたのはいうまでもありません。…中略…そういうことを日本の歴史のなかできちん

と記述し、学校でも教えるのは当たり前です。(改行)でもそのときに『わたしたち和人の歴史はこんなにひどいんだ』と否定的な印象を与えてはいけません。そう教えられた人は、結局自分のなかでアイヌについて否定的なイメージを作ってしまうと考えるからです。さっきいいましたが、過ちをきちんと反省できるということを含めて、日本人全体が誇りに思える日本の歴史のなかにアイヌ民族の存在が位置づけることが、現在そして未来の和人とアイヌ民族の関係にとって必要なんじゃないかと思います。(改行)逆のことはアイヌの側にもいえます。『わたしたちは昔は幸せだったのに、和人のせいでひどい目にあわされて、今困ったことになっているんだ』と考えることしか教えられなければ、そのアイヌ自身が今の社会のなかでアンチテーゼとして生きることになってしまいます。まだこれから取り返さなきゃならないこともあるけれども、全体として自分の生活や仕事は今の社会を支えているんだ、という感覚はアイヌにとっても和人にとっても必要なんだと思います」

とし、さらに、今アイヌ文化として教えられるのは百年とか三百年とか前の文化のモデルであるから、それを教えるときには同じころの和人の文化、それもたとえば東北地方の農村の文化と対比してほしい、と述べている(奥田 1997: 328-329)。

筆者は、最近この発言を改めて読みなおし、共感するとともに、学校で教えるべきことのヒントを得たように思った。筆者は例年、教員向けの研修会等で、北方の先住民族やアイヌ民族について話をする機会を与えられるが、1~1時間半という短い時間のなかで、何に重点を置くべきか、つねづね考えさせられてきた。まずは、アイヌの歴史や文化を学ぶ意味を考え、それぞれの立場を見つめ直すことが重要であろう。歴史や文化の個別の内容については、適切な文献や資料等を紹介することとし、ただ文献等が少ないものについては自分が話す意味があろう。そこで本稿では、同時代の和人の生活を伝えるためにも、移住者がアイヌに助けてもらった話を、聞き書きなどから提示したいと考える。また、地域学習の目的に則し、児童になじみのある網走管内の事例を中心にする。

副読本の中には、「開拓史観偏重」という長年の指摘にもかかわらず、「荒れた土地」を切り開いた人びとの苦勞によって「作物がゆたかに実る土地」になったと記されたものがいまだに存在する。魚や小獣の獲り方、食べられる植物や薬草の知識をはじめ、防寒着の素材となる毛皮の扱いや供給、家の建て方など、アイヌの人びとに教えられ助けられたという入植者の話は、まだ多くあるはずだ。育てられない赤ん坊をアイヌ民族の家庭に引き取ってもらったという話もちこちにある。そうした話をとおして、明治以前の北海道が「荒れた土地」ではなかったことと、何が「豊かさ」なのかを考えるきっかけを与えられるのではないか。同時に「発達」や「発展」という言葉が、農耕(業)と対で使われる価値観にも疑問を投げかけたいと思っている。

3. 網走周辺の人口概況

開拓者らの話を挙げる前に、網走管内の明治期の人口動向と行政区分について、簡単に示しておきたい。明治2 (1869) 年、北見国の内に北から礼文・利尻・宗谷・枝幸・紋別・常呂・網走・斜里の8郡の行政区域名が制定される。明治4年、北見国東部の4郡は根室支庁に属することとなる。明治5年に網走郡の8村名が能取・最寄・網走・勇仁・新栗履・藻琴・娜寄・濤沸と定められ、明治8年に漢字名が当てられる。明治13年に網走外三郡役所開庁、明治30年に郡役所を廃して網走支庁が設置される (網走市史編纂委員会 1958)。

人口は、上記北見国4郡 (14年に網走郡に編入された釧路国網尻郡を含む) について、網走市史をもとに、およそ5年ごとに表にした。アイヌの戸数はゆるやかに漸減しており、人口は4年の1,114人から44年の618人に半減した。この間の主な事象は以下のとおりである (網走市史編纂委員会 1958、1971/統計の原典は「開拓使事業報告」「道庁統計資料」)。

明治13年 網走外三郡役所開庁 (網走・紋別・常呂・斜里)

4郡人口は1,000人足らず (本籍者はすべてアイヌ)

しかし、このころから網走では漁業者を中心に定住する移住者が増え始める。

明治24年 網走の大曲で山田製軸所 (マツチ軸) の操業開始

同年 網走～上川間の道路開削着工、同年末完成

明治30年 野付牛村 (現北見市) に北光社移民団 (112～120戸/500～650人?)

同年 野付牛村に屯田兵入植。翌31年までに597戸

同じく湧別にも屯田兵399戸が入植し、両者の兵員と家族の合計5,456人と倍増
大正1年 鉄道が網走まで開通

大正10年 網走支庁39,844戸/199,973人

北見4郡 (網尻郡含む) 人口

年	アイヌ戸数	アイヌ人口	全戸数	全人口	アイヌ人口/全人口 (%)
明治4	277	1,114			
10	258	1,002			
14	256	927			
20	250	809	369	1,309	61.8
25	234	738	853	3,135	23.5
30	232	647	2,870	12,264	5.3
36	203	671	5,378	22,695	3.0
40	195	654	7,565	34,423	1.9
44	208	618	12,979	55,893	1.1

※アイヌ人口/全人口比は、小数点第2位を四捨五入 (網走市史編纂委員会 1958、1971)

上の表のように、明治20年代から移住者の人口が急増し、30～31年の屯田兵入植により

網走支庁管内の人口はさらに増した。一方、アイヌ人口は漸減し、全人口に対する比率は急激に小さくなった。

4. 網走周辺の移住者とアイヌ民族の関係についての語り

ここでは前述したとおり、明治から大正期にかけて、移住者がアイヌの人びとに助けられたという話を、移住してきた本人やその子孫の語りからいくつか挙げてみる。明治以前から、官吏や探検家の旅が、道案内・荷運び・渡船などアイヌの人びとの協力によってなし得たことは、多くの文献で紹介されている。また、網走以外の道東地域での開拓者とアイヌ民族の交流については、北海道発行の『北の生活文庫』の第2巻『北海道の自然と暮らし』（矢島 1997）中、十勝に入植した晩成社の幹部の日記などの紹介に多くの頁が割かれていることを付け加えておく。

なお、学校での利用を想定していることから、児童向けとしてふさわしくないとと思われることがらやプライバシーに関わることは、表現に手を加えた部分もある。また、旧字や旧かなづかいは改め、紙幅の関係などから、略した部分は「…」で記した。

・「最初の自由居住者」瀬川惣之助さんの話

「代々猟師であったので、郷里南部から父と一緒に熊や鹿を猟するため明治八年に厚岸に来たのだが明治十年に開拓使本庁から北海道を開拓するのに熊や狼が人に危害を加えるのでこれらを退治しなくては開拓に入る人はない。それでこれを退治するものには狼一頭に付七円、熊一頭に付五円の捕獲手当を呉れるという御布令が出た。…中略…私一人でその年の四月斜里のアイヌ人喜六を案内人にして網走に入った。…中略…網走で初めて越年したのは明治十二年の秋からであった。その時は和人で又十の番屋以外に越年する人はなく、アイヌ小屋に宿ることになったものの米を求めることができない。…中略…ようやくアイヌの人たちから三四升分けて貰って、それを基にして多くは狩捕った熊や鹿の肉を食ってアイヌ人と同じような生活を続けてその年を越しました。明けて十三年の年は、仲々愉快な年でした。越年中は私共はアイヌ人を二三人連れて山に狩りに出てやはり熊の足を蒐めましたよ。…後略」（米村 1981：185）

・大場七之助さんの話（明治31年北見に屯田兵家族として入植／娘の工藤氏記述）

「近くの常呂川の魚を獲り、野兔などを捕えて昔から土着しているアイヌ人とも仲良く暮し、いろいろくらしの知恵を学んだということです。…中略…「チャチャ」と呼ぶアイヌ人一家との交りは、後々まで楽しい思い出として残ったとのこと。熊や野犬の皮をなめず技術も教えてもらい、毛皮を防寒着として父は何時までも愛用しておりました。それらの事は父が時折私達や孫達にも、ボソボソと語ってくれました。」（工藤 1982：9-10）

・中沢広さんの集めた話（明治35年生まれ／端野の屯田兵入植の二世）

「大正三年頃の話である。…中略…誰が世話をしたか十一月になり初雪も来た頃のことだったが、お雪さんは富やんに舟を漕がせて川を渡り、その子をアイヌに貰ってもらったとの報告に来た。何

という名をつけたかと聞くとアイヌの名での「D」*註 というのだと答えた。「D」というのは、アイヌでは一番いい名だそうで大切に育てるといっていたと安心したような顔であった。その後Dの消息は聞くこともなしに過ぎた。そのアイヌの一家がコタンを去って美幌に移ったという話だったから消息の聞きようもなかったが、お雪さんは気になったか、美幌コタンまで行って見たが、キネタンペに移ったというので会えないままに戻ったということである。…中略…Dは立派なよいアイヌの婿さんと一緒になって、阿寒に熊彫りの店を出し、小まめに働いているとのことだった。」(中沢 1966: 65-73)

昭和37年に丸瀬布町(当時)で開かれた開拓古老座談会の記録から、同町の郷土史家・秋葉実氏がアイヌに関する部分を抄出している(秋葉 2003: 166-170)。

・畑辰次郎氏(75歳 金山)の話 *座談会当時の年齢 引用のまま 以下同

「川村さんは前は上ムリイに居ったが、あとからはわしの道路向いの塩田農場に居った。川村さん方にはいろいろ世話になったもんじゃ。この草は何の病気に効くとか、この草も食用になる。この木の実は精がつくとか、貧しかったわし等はどれだけ助かったか分からない。そして人格者じゃった。」

・滝口庄八氏(73歳 武利)の話 (畑氏に続けて)

「ほんだ、ほんだ。今の若い者さ言ってもほんにすないけど、秋になると川の中に竿を立てても、倒れないぐらい秋味が上ってきたなァ。…中略…アキアジの獲り方を教えて貰わなかったら、遠軽まで六里の道をかけて魚買いに行く銭も暇もないし、栄養不良になって開拓など成功しなかったべさ。」

・因末次郎氏(72歳 新町。町議長)の話

「わしらが入植したころ、今は川床になっている下段のわしの区画の西寄り(現新町409番地)に、布施イタキレなど五軒ほどが住んでいた。熊田由太郎とか伊藤など、ほかは忘れてしまった。メノコたちがよう野菜を買いに来て、家内とは親しかったようじゃった。川村さんには冬山に連れて行って貰い、仮小屋を作り泊まったこともある。必ずしも豊かとは見えなんだが、自然に対する畏敬の念が強く、礼儀正しい人たちだったことを覚えとります。」

・及川清治氏(61歳 南丸)の話

「前略…うちは川向いにも土地があったし、川向いの方は水が増水した時は涉れず、それは不自由していたんです。それで川村さんが何日もかけて丸木舟を作ってくれ、七号線の辺りを渡船場にしました。中島にも渡し舟を作ってくれ、中島の人が助かっただけでなく、そのころ学校は西町にありましたから、武利の子供たちは渡し舟を渡って近道するようになったんです。渡し舟は大正11年の大洪水で二つとも流されてしまったのは惜しかったけど、あの渡し舟があったお蔭で、水害のあと中島橋と共栄橋が架けられたんです。本当に川村さん方は開拓の恩人と言ってもいいですね。」

・田村憲治氏(73歳 水谷)の話

「それとだね。わしらもそうだが、入地したときはみんな着手小屋へ入った。その笹小屋も、やた

らに笹を刈ってきて茸けばよいというもんじゃない。どんな笹がいいとか、ここは上向けに茸くとか永年にわたるアイヌの生活の知恵の積み重ねが生かされているんです。『オレはアイヌの世話になった覚えなどない』という人がいるかもしれないけど、先に入った人がアイヌの人たちから教わり、後から入った人にそれを教えた、ということなんです。ほとんどは裸一貫で来たんですから、アイヌの人たちの援助がなかったら、真面目な人はアキアジも獲れないで栄養不良になる。薬屋など回って来ない時代だから、薬草の見分け方を知らなければ、病気になってもどう仕様もない。出面取りをしてでもいいから、内地へ帰りたい、というようになっていたでしょうね。(改行) わしらは湧別屯田で、入植した時はまだ子供ながら家はすでに建てられていたが、丸瀬布では笹小屋からの出発で、アイヌの人たちの生活の知恵に教わったことが多い。」

これらの話に対して、秋葉氏は次のように述べる。

「ところで、前述の人たちは何れも私がそれまで聞き取りをした人であるのに、祖父や父も含めて『アイヌの人に世話になった』というのはこの時が初めてであった。開拓期には、生活態様は相違しているとはいえ、アイヌの人びとと同じ生活水準か、中にはそれ以下の人もいたと思われ、アイヌは後進民族視されていた時代であるから、『アイヌの人たちに世話になった』とは素直に言えなかった。(改行) それか、ほとんどは家も建て替えた。『かまど』は息子たちに譲ったで、生活と気持ちの面でゆとりが生じ、感謝の念が率直に言葉に現れたものと思われる。これを享けて町は、同37年11月3日開拓50年記念式に当たり、一族の名前も川村さんの本名も子孫の消息も判らないまま、川村熊吉(本称シツツムアイノ、戸籍シートアイヌ)を開拓功労者として顕彰した。」

このように昭和30年代後半になって、開拓期を客観的に振り返ることができ、アイヌへの感謝の気持ちも素直に出せるようになった、というのである。本書のような一般書の刊行は聞き取りから40年後であり、昭和30～40年代といった比較的新しい時代の聞き取りの例は、知られていないだけで、まだあるのではないかと思われる。多くの郷土史家たちが、市町村史の編纂のために昭和20～40年代に聞き取りを行なった後、資料をまとめ上げたものは公刊していても、調査時の生のデータは埋もれている可能性があり、掘り出しが必要だ。さらに、道東では入植期や農地開拓が遅くまで続いたので、開拓二世は存命して直接聞き取り調査をすることができるかもしれない。

5. おわりに

文献を渉猟する十分な時間がとれないまま、教育学や歴史学の専門家でない筆者が取り組むには大きすぎる課題である。しかし、アイヌ民族への理解の促進は、最初に取り組むべきことがらと考えているため、至らぬ点があることは承知で試案として書いた。今後も開拓期の語りなどを集めるとともに、教員や児童の反応も踏まえて、筆者自身が博物館ですべきことを探っていくたい。

昨夏、アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会がまとめた報告書には、「児童・生徒

の発達段階に応じた適切な理解」や「指導者の適切な指導を可能とする方策」を研究し、成果を教育現場で活用してゆくことが必要と記されている。何をどう教えるかについての研究が進むことを期待する。

注：「アイヌ語の名前」が記されているが、プライバシーに関わることであり、また表記がどこまで正確かも不明なため、イニシャルとした。

主な参考文献

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

- 1999 『アイヌ民族に関する副読本の編集方針』同財団：札幌
- 2001 『アイヌ民族：歴史と現在 ー未来を共に生きるためにー』同財団：札幌
- 2004 『副読本「アイヌ民族：歴史と現在」に関するアンケート調査報告書』同財団：札幌
- 2008 『アイヌ民族：歴史と現在 ー未来を共に生きるためにー』改訂版 同財団：札幌

秋葉 実

- 2003 『松浦武四郎 上川紀行』（旭川叢書第28巻）旭川振興公社：旭川

網走市史編纂委員会

- 1958 『網走市史・上巻』網走市役所
- 1971 『網走市史・下巻』網走市役所

網走市社会科副読本編纂委員会

- 2008 『小学校社会科副読本 あばしり』網走市教育委員会：網走

伊藤 勝久

- 2009 「北海道の義務教育初等教育学校におけるアイヌ民族伝統文化理解教育の現状」『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』第8号（上巻 研究篇）pp.1-103
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構：札幌

榎森 進

- 2000 「開拓とアイヌ民族」『白い国の詩』平成12年8月号（2004 榎森進編『アイヌの歴史と文化Ⅱ』pp.74-83に再掲「アイヌの歴史と文化」刊行促進協議会：仙台）

奥田 統己

- 1997 「和人にとっての民族と文化」札幌学院大学人文学部編『アイヌ文化の現在』（公開講座北海道文化論第13集）pp.303-335 札幌学院大学生活協同組合：江別

北原 次郎太

- 2009 『「アイヌの人々を理解する」とは ー学芸員講話の実践例からー』北海道立北方民族博物館編『北太平洋の文化 ー北方地域の博物館と民族文化ー③』（第23

齋藤 “明治時代の網走の暮らし”とアイヌ —小学社会科のための素材探し—

回北方文化シンポジウム報告書) pp.45-50 (財)北方文化振興協会：網走

工藤 千代

1982 「ハッカ釜 一父・大場七之助の生涯」『北海道を探る』1:8-15 北海道みんなの文化研究会：札幌

佐々木 博司

1998 「チセのある学校にて」『Arctic Circle (北海道立北方民族博物館友の会季刊誌)』No.27 pp.8-9 (財)北方文化振興協会：網走

札幌市教育委員会指導室編

2008 『アイヌ民族の歴史・文化等に関する指導資料 一第5集一』札幌市教育委員会：札幌

末広小のアイヌ文化学習を支援する会

2009 『さあアイヌ文化を学ぼう！ 一千歳市立末広小学校のアイヌ文化学習』末広小のアイヌ文化学習を支援する会：札幌／明石書店：東京

中沢 広

1966 『開拓夜話』端野町開基70年記念事業企画委員会：端野(現・北見市)

矢島 睿

1997 「開拓地の暮らし」北の生活文庫企画編集会議編『北海道の自然と暮らし』(北の生活文庫第2巻) pp.184-223 北海道：札幌

米村喜男衛

1943 (1981)「北見郷土史話」(改訂再版)『北方郷土・民族誌2』所収 北海道出版企画センター：札幌

参考にした主なウェブサイト (2010年2月現在)

札幌市教育委員会学校教育部指導室

アイヌ民族に関する教育

http://www.city.sapporo.jp/kyoiku/top/education/ainu/ainu_minzoku.html

首相官邸・政策会議等の活動

アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainu/index.html>

北海道教育庁学校教育局義務教育課

「アイヌの人たちの歴史・文化等に関する啓発資料『ピラサ』の発行について」

<http://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/hk/gky/pizara.htm>

文部科学省

現行学習指導要領(平成10年12月告示、15年12月一部改正)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm